

第1章

研究の全体像

1 本校の校内研究について

本校では、1つの校内研究主題に基づいて取り組む「課題研究」「プロジェクト研究」「調査研究」「寄宿舍の研究」の4研究があり、それぞれが関連している。

課題研究

本校の研究の中心的研究と位置付けている。本校における教育実践等のニーズの優先度などに応じて設定された実践研究であり、日常の指導実践と最も密接に関連する研究である。

プロジェクト研究

課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に関係する組織で進めるものと位置付けている。学校教育の動向や本校における教育実践等のニーズに基づく緊急の課題に関する実践的・総合的研究であり、校内部署の横断的なプロジェクトチームを編成して実施することもある。取り組むべき課題があるかどうか、どのような組織で取り組むかといったことは、年度により異なる。

調査研究

文字通り、調査による研究である。校内外における教育実践等に関する情報を、資料・統計として調査及び研究するものであり、研究内容に関する専門性の高い部署が担当する。取り組みについては年度当初に検討して決定している。

寄宿舍の研究

寄宿舍研修部を中心に、校内研究主題及び学校が行う上記3研究の流れに沿う形で取り組むものと位置付けている。また、研究推進委員会を通じて学舎の情報交換や連携を図っている。

図1 本校の校内研究

4つの研究を進めるそれぞれの研究組織は、研究主題や内容によって変化する（表1）。また、研究の方法としては、理論研修（学習会）、研究授業、事例検討、教材教具の開発・工夫などがある。各研究組織は、研究の内容に合わせて方法を選択し、ときには組み合わせている。

	研究主題	概要（主な研究内容）	研究の種類（研究組織）
第1次	【平成9～10年度】 生徒一人一人の発達段階・特性等に応じ社会参加・自立を促す教育課程の編成はいかにあるべきか	教育目標の具現化、教育課程の基本方針、指導内容の選択・組織、個別指導計画の作成、地域環境・素材を生かした教育活動	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舍の研究
第2次	【平成11～13年度】 生徒一人一人が自立し、社会参加できる力を育む授業づくりと教育課程の編成はいかにあるべきか	教育課程の編成、授業の実践と検証、個別指導計画の充実、現場実習及び進路状況の把握	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舍の研究

第 3 次	【平成 14～16 年度】 生きる力を育む指導の研究	総合的な実態把握、指導課題の具体的 設定と指導内容の関連、単元・題材指 導計画の工夫、個別化と集団化が最適 化された授業作り	・課題研究（学年部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 4 次	【平成 17～20 年度】 授業作りに活かす、教師の専門性の向 上を追求する実践的研究	課題単元の教材開発、作業工程分析の 充実、個別の教育支援計画等の様式及 び作成に関する研究、体力つくりの見 直し	・課題研究（形態部会） ・P 研究（CO+進路部代表、 体力づくり部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 5 次	【平成 21～23 年度】 社会参加・自立を目指した働く力の育 成	教科及び領域・教科を合わせた指導の 授業研究、体力つくりの見直し、指導 内容表の検討、教育支援計画・指導計 画・通知表のあり方の整理	・課題研究（学年部会） ・P 研究（体力づくり部会、 研推委、指導計画 WG） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 6 次	【平成 24 年～26 年度】 社会の変化に対応できる力を育てる 実践的研究	キャリア教育の指針「今養版キャリア プランニング・マトリックス」の作成、 指導内容表の検討、作業学習評価の見 直し、教育課程検討、校内組織検討、 事例研究	・課題研究（形態部会） ・P 研究 ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 7 次	【平成 27 年～29 年度】 卒後を見据えたキャリア発達を促す指 導法の研究 ～協同学習と生活指導の充実を目指し て～	協同学習の観点を取り入れた授業研 究・改善、キャリア教育の指針「今養 版キャリアプランニング・マトリッ クス」の改訂、卒業生の実態調査	・課題研究（形態部会） ・P 研究 ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究

（P はプロジェクトの略 / CO はコーディネーターの略 / WG はワーキンググループの略）

表 1 本校の校内研究のあゆみ

校内には教務側の研修部と舎務の研修部と 2 つの研修部が存在し、校内研究の企画・推進は、互いの研修部が連携し合い、研究主任が調整を図りながら行っている。研修部員も委員となっている研究推進委員会は、4 つの研究が相互に連携して推進されるよう、必要に応じて連絡・調整する、いわばコーディネーター的役割を果たしている。（図 2）

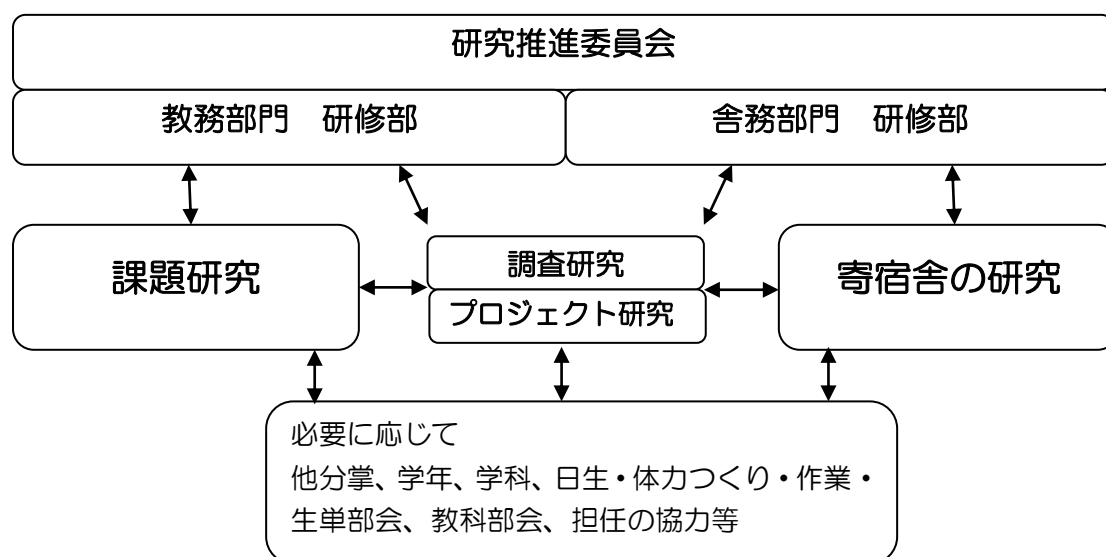


図 2 本校の校内研究組織

2 第8次研究

(1) 研究主題

キャリア発達を促すためのカリキュラム・マネジメント
～新しい職業学科として社会に開かれた教育課程の構築を目指して～

(2) 主題設定の理由

社会に開かれた教育課程を実現するために、各学校においては「カリキュラム・マネジメント」が求められている。これは、学校全体として、教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、実施状況に基づく改善などを通して、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るものである。具体的には、教科等の目標や内容を見渡し、特に学習の基礎となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のために、教科等横断的な学習を充実させたり、主体的・対話的で深い学びの充実のために単元など数コマ程度の授業のまとまりの中で、習得・活用・探求のバランスを工夫したりすることである。

本校はこれらがどの程度進んでいるかを考えると、図3の『どのように学ぶか』については、協同学習や生活指導において実践的研究が進められおり、継続が必要であると考えられる。『何ができるようになるか』については、今養版キャリアプランニング・マトリックス（以下「マトリックス」という。）をはじめとして、様々な教育課程の骨格たる部分が整備されつつある状態であり、これを一層進めていく必要があると考えられる。『何を学ぶか』については、観点別評価と連動して単元指導計画の様式が改訂されたり、指導内容表に指導該当学年が明記されたりするなどして、各学年で創意工夫の基で検討されているところだが、まだこれらが動き出した状態であり、学びの連続性・系統性の検討はこれからといった状況である。また、教務部の平成29年度前期評価には、「教育課程の見直し・合わせた指導から教科学習へという教育課程の大きな転換期に来ている。」とある。そのため、学校教育目標の達成に向けてや新しい職業学科として社会に開かれた教育課程を実現すべく、キャリア教育の視点を基礎として、様々な角度からカリキュラム・マネジメントに取り組むことで、生徒のキャリア発達を効果的に促すことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

ところで、第7次研究では、学舎ともに生徒の課題を絞り、そこに焦点を当て、指導方法の実践的研究に取り組んできた。しかし、その指導方法を改善・工夫していくことや、あるいは新たな指導方法を取り入れるなど、授業・指導のさらなる改善に向けた実践的研究は継続していく必要性を再認識した。さらに、本校の教育課程（キャリア教育の形）を整理していくことも必要である。マトリックス、指導内容表、年間指導計画、単元指導計画と観点別評価などを整備し、授業・指導の実践へと結び付けていくことで、適正に機能させていくことが求められる。そのためには、教育課程検討委員会をはじめ、全校職員による研究の取り組みへの協力、検討や共通理解を図っていくことが重要である。このような動きと並行して、卒業生や在校生の実態調査を基に、在学中に身に付けさせるべき力は何かをしっかりと把握していくという取り組みも欠かせないものとする。

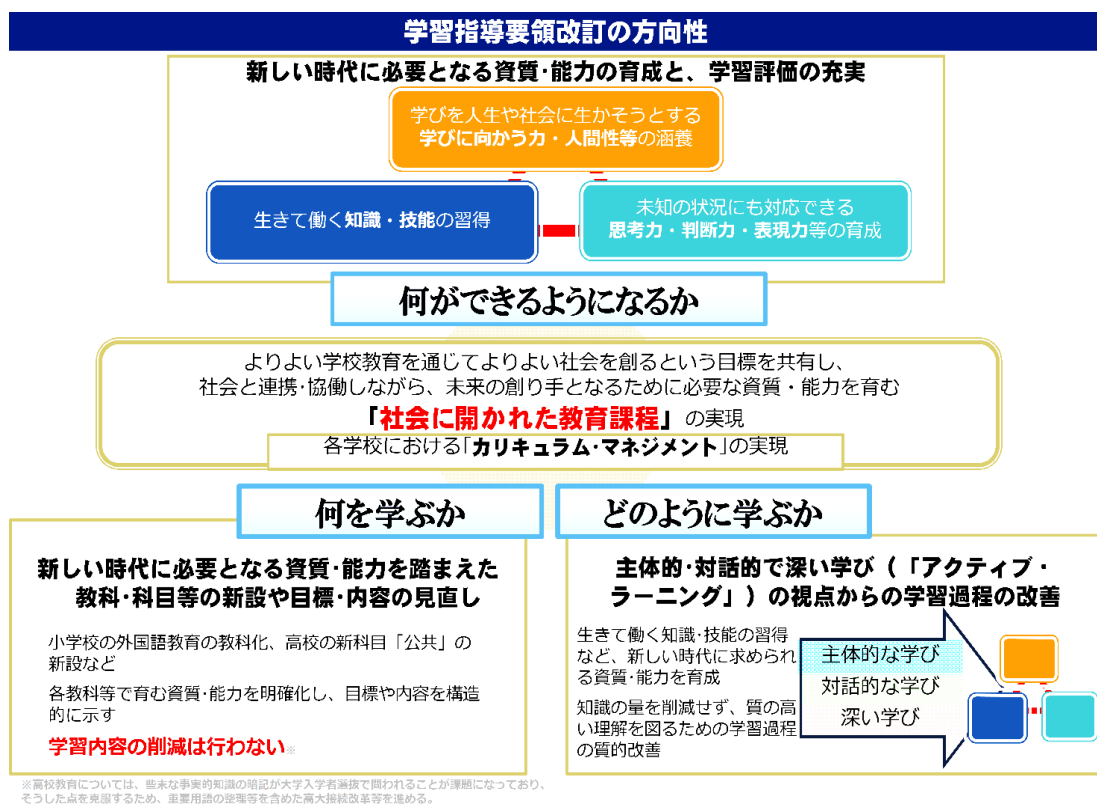


図3 「学習指導要領改訂の方向性」

【出典：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）補足資料】

（３）第８次研究の方向性

1 年次 (今年度)	・ 全学年単元配列表（第 1 次案）の作成（P・研推） ・ 各単元計画の作成（課） ・ 協同学習をベースとした「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業実践（課） ・ 授業振り返り（補助簿を活用した観点別の学習評価）（課） ・ 振り返りを受けて、単元配列表の整合性の確認（P・研推） （今養版キャリアプランニング・マトリックスの内容の精選）（P・研推） ・ 模擬株式会社授業実践（各学科） ・ 寄宿舍研究（舎） ・ 調査研究（調査）
2 年次	・ 全学年単元配列表（第 2 次案）の作成（P・研推） ・ 各単元計画の作成（課） ・ 協同学習をベースとした「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業実践（課） ・ 授業振り返り（補助簿を用いての学習評価）（課） ・ 振り返りを受けて、単元配列表の整合性の確認（P・研推） （今養版キャリアプランニング・マトリックスの内容の精選）（P・研推） ・ 模擬株式会社授業実践（各学科） ・ 寄宿舍研究（舎） ・ 調査研究（調査）

3 年次	・ 全学年単元配列表（確定版）の作成（P・研推） ・ 各単元計画の作成（課） ・ 協同学習をベースとした「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業実践（課） ・ 授業振り返り（補助簿を用いての学習評価）（課） ・ 振り返りを受けて、単元配列表の整合性の確認（P・研推） （今養版キャリアプランニング・マトリックスの内容の精選）（P・研推） ・ 模擬株式会社授業実践（各学科） ・ 寄宿舍研究（舎） ・ 調査研究（調）
------	---

※（課）は課題研究、（P）はプロジェクト研究、（舎）は寄宿舍の研究、（調）は調査研究の略

（４）１年次の研究内容

① 課題研究

１年次は、各学年で作成した単元計画を基に、教科ごとに授業研究をする。計画を立案する際には、協同学習をベースとしつつ、「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れる。また、授業実践後には、MT・STともに「主体的・対話的で深い学び」につなげる指導ができたか振り返りレポートを作成し、教員一人一人の授業力向上を図る。さらに、その振り返りレポートを基に、プロジェクト研究で単元配列表の整合性の確認につなげていく。

② プロジェクト研究

１年次は、各教科担任が作成したシラバスを基に、全学年の単元配列表を作成する。また、単元配列表と単元計画を基に「課題研究」にて授業実践を行った上で、単元配列表の整合性がとれているのかを確認する。その整合性を確認し、必要に応じて今養版キャリアプランニング・マトリックスの加除修正を加えていく。さらに、平成 29 年度より卒業後に向けた実践的な学びのために、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」を設立している。今年度も商品開発や仕入れ、生産と販売の計画、決算に至る一連の流れを授業で継続的に取り扱っていく。

③ 調査研究

進路指導部主体で「今金町キャリア教育・職業教育研究フォーラム」をはじめ、様々な機関や組織、卒後支援などを通して卒業生の実態（成長と課題）に関する情報や、雇用環境等の変化に関する情報を集め、本校の教育活動に足りない要素や今後必要となる要素（在学中に身に付けさせるべき、新しい時代に必要となる資質・能力）を分析する。

④ 寄宿舍の研究

寄宿舍では、舎での生活や指導を通じ、基本的生活習慣や充実した余暇が確立されることにより、将来社会に出た際に、自分らしい生き方を選択するための能力や態度を身に付けることができると考え、「卒業後に向けたキャリア発達を育む指導」を主題として設定した。

１年次の研究では、研究主題に関わる生活習慣や余暇についての対象生徒を抽出し、生徒の実態に応じた課題に対してどのようにアプローチしていくか考察していく。

(5) 研究推進計画

① 研究推進委員会

ア 目的

- ・「課題研究」、「プロジェクト研究」、「調査研究」、「寄宿舍の研究」それぞれの担当者が連携できるよう連絡・調整する場として機能させる。
- ・それぞれ担当している研究が他の研究にどのように作用していくのかを確認する場とする。
- ・客観的な見方、考え方を取り入れ、確実に業務を進める。
- ・参加者は、各種研究の担当者を対象とする。ただし、必要に応じて担当者以外にその研究で中心的に携わっている職員も招集し、拡大研究推進委員会として開催する。

イ 日程と主な内容

回	月日	主な内容
1	4/26	全体研修①に向けての確認（校内研究体制、第8次研究各計画）
2	6/1	全体研修②に向けての確認（校内研究体制、第8次研究各計画）
3	7/20	各研究の進捗状況の確認、研究紀要についての確認
4	9/14	各研究の進捗状況の確認
5	10/19	各研究の進捗状況の確認、全体研修③に向けての確認（中間報告内容）
6	12/7	各研究の進捗状況の確認
7	1/18	単元配列表、マトリックスの整合性の確認、次年度の方向性の検討
8	2/1	全体研修③に向けての確認（最終報告内容）、次年度の方向性の確認

② 全体研修会

ア 目的

- ・本校の各研究の意義や目的、推進方法について理解を深める場とする。
- ・各研究の進捗状況を把握し、その後の取り組みに向けて意見交換したり、共通認識をもったりするための場とする。
- ・今年度の研究のまとめ、また次年度の方向性について研究推進委員会が提案し決議する場とする。よって、参加者は全職員とする。

イ 日程と主な内容

回	月日	主な内容
1	4/6	第7次研究の振り返り、第8次研究の方向性について
2	6/8	全体提示（本校の研究について、各研究の推進計画の発表）
3	10/19	中間報告（各研究の中間報告、それを受けて意見交換、今後の進め方についての確認）
4	2/8	最終報告（各研究の最終報告、次年度の方向性について検討）